

2016年 オーストラリア遠征報告書

1. 遠征者

池邊 聖 (慶應義塾大学3年:選手)

荒井佑太 (法政大学2年:選手)

明石岳志 (京都産業大学4年:スタッフ)

2. 滞在先

オーストラリア ヴィクトリア州ベンディゴ

3. 日程

3/8 12:15 a.m.の深夜便で成田からメルボルンへフライト (Jetstarによる直行便)

3/9 (午前) ベンディゴへ移動 (午後)トラックの試走

3/10 (午前) 2時間半ほどロード練 (午後) ベンディゴ市内観光。

3/11 (午前) 軽めのサイクリング (午後) 夕方から Bendigo Club Track Race

3/12 (午前) クリケット観戦 (午後) Bendigo International Madison

3/13 (午前) クリケット観戦 (午後) Bendigo International Madison

3/14 (午前) メルボルン空港へ移動 (午後)メルボルン観光

3/15 日付が変わってすぐ、0:55 a.m.の夜行便で帰国

Bendigo International Madison :Result

<http://results.vic.cycling.org.au/racer/Sei/Ikebe>

<http://results.vic.cycling.org.au/racer/Yuti/Arai>

4. レポート

Tuesday March 8th, 2016 (Day 1)

成田空港にはフライトの3時間前に集合。自転車4台(各選手ロード・トラック1台ずつ)にスーツケースが3人分という大荷物のため、荷物を預ける段階等でもしものトラブルにも対応できるように早めの集合。超過料金が少し発生するも、その他はスムーズに手続きを終えることができた。今回は12時過ぎの便でメルボルン国際空港まで、約10時間のフライト。

現地時間で深夜12時にメルボルンへ到着。到着時間が夜中のため、この日は空港近くに予約しておいたホテルに宿泊。ホテルまではワゴンタイプのタクシーに自転車とともに運んでもらった。タクシーで、なおかつ夜間ということもあり値段は高めであったが、無事ホテルに着くことができた。

文・明石

Wednesday March 9th, 2016 (Day 2)

2日目の朝、前日に深夜到着ということで長く睡眠は取れず移動疲れは残るも、一同体調は良く起床。メルボルンと日本の時差は+2時間。時差ボケを全く感じないメリットは大きい。ホテルの送迎バスで再びメルボルン国際空港へ。

今回ベンディゴまでの移動手段としては、ホームステイ先の家族から紹介して頂いた空港からのシャトルバス

(bendigopairportservice.com.au) を選択。このバスは Web 上で事前に予約を行い、支払いもクレジットカードから引き落とされるため当日支払いをする必要はない。また予約の段階で「自転車の台数」の項目があるため、追加料金は発生するもののバス移動においても問題なく自転車を運べる。

こういったサービスの充実度は日本と全く異なる。バスは約2時間でベンディゴ駅に到着。日本からベンディゴまで、無事トラブルなく到着することができた。



バスの後方に荷物用のキャリアが付いている

駅には今回のホームステイでお世話になる Murphy 氏と Knox 氏が迎えに来て下さった。家でお昼を頂き、午後はレースの行われる Tom Flood Sport Centre に試走へ。事前に聞いていた通り、このトラックは陸上競技場のようなフラット形をしており、カントはほとんどない。またホームストレート以外は曲を描いており、いくなれば饅頭のような形状。



Tom Flood Sports Centre は一周約 420mのフラットなトラック

夕方はホームステイ先の小学生の息子さんがクリケットをしており、その練習を見学に行った。一面緑の芝の公園でクリケットを練習する子供たちに交じって私達も体験させて頂き、日本ではできないスポーツを大いに楽しんだ。

夜は家で BBQ を用意して頂いた。外のテラスで食卓を囲み、大きな BBQ コンロで焼かれたお肉が出てくるという、私達が想像した通りの光景に皆興奮しつつ、家族と団らんを楽しみながら美味しいディナーをご馳走になった。



子供達のクリケット練習の風景



テラスでテーブルを囲んで夕食を楽しむ

文・
明石

Thursday March 10th, 2016 (Day 3)

暑くなる前にロードに乗る予定だったので 6:45 に起床。しかし雨が降っていたので二度寝。雨が止み 11:00 から 2.5 時間ほどのサイクリングに。ほとんどノンストップで走ることができた。道路は日本より綺麗で、車は少なくとも走りやすい。

帰宅後 17:45 まで寝て 19 時からのレースに備える。15 分前、早くて 30 分前に着いていけばいいらしい。1 時間前には着いていよと言ったら驚かれた。しかし、残念ながらレースは雨で翌日へ順延。まとまった雨は 3 ヶ月ぶりとのこと。レースが行われる予定だった場所で頼まれて地元の小さな女の子と写真を撮った。この時期に日本人の学生がやってくることは知られているらしい。

前日と打って変わって涼しく過ごしやすく、むしろ夜は肌寒いくらいの 1 日だった。

文・池邊



綺麗な道が延々と続く



練習途中にて。樹齢は 150 年超。
現地で有名な木である



木曜の夜は雨でレースが順延となり、ホストファミリーとレストランへ。

Friday March 11th, 2016 (Day 5)

「Bendigo club track race」

■結果

- ・スクラッチ (A Grade / 20 周回)
池邊:順位不明 / 荒井: 6 位
- ・ハンディキャップレース予選 (4 周回)
池邊: 1 位 / 荒井: 2 位
- ・ハンディキャップレース決勝 (4 周回)
池邊: 2 位 / 荒井: 4 位

この日は 1.5 時間ほどのイージーライドの後、ベンディゴ中心部へショッピングに。Bendigo International Madison のチラシが街中で散見された。

19 時頃にスクラッチが始まった。日の入りが 20 時頃なのでまだ明るく、かなり暑い。ペースは覚悟していたほどではなかったが、特殊なバンクの形状から、先頭交代の勝手がわからず沈んでしまった。(バンクは 1 周 420m くらい、ホームは直線でそれ以外はカーブ、微妙に平らではなく第 4 コーナーが下っていて、第 2 コーナーが上っている。)

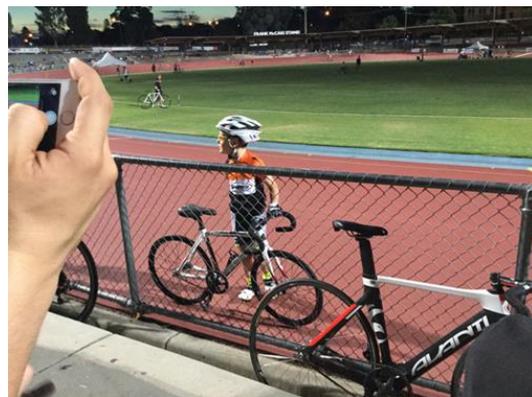
参加費として 10 オーストラリアドル支払い、賞金としてハンディキャップレース予選 1 位で 10 オーストラリアドル、決勝 2 位で 85 オーストラリアドル手にした。広告のようなものは目にしなかったが、スポンサーがきちんと付いていたらしい。

レース終了が 22 時頃。終わった瞬間皆蜘蛛の子を散らすように帰宅していった。

文・池邊



金曜日の晩のレース。規模は大きくないが人は集まる。日々の生活の余裕から来ている気がした。



こんな小さな子もレースに出場する

Saturday March 12th, 2016 (Day 4)
「Bendigo International Madison :Day1」

■レース

- ・Gold and Opal Wheelrace (2000mハンディキャップレース)
池邊:Heat2 4位・Final 1 2位 [HC95m] / 荒井:Heat2 2位・Final 8位 [HC75m]
- ・Golden Mile Wheelrace (1600mハンディキャップレース)
池邊:Heat3 1 0位 [HC75m] / 荒井:Heat6 9位 [HC65m]
- ・スクラッチ (A Grade / 15 周回)
池邊: 1 2 位 / 荒井: 5 位

オーストラリアに来て 4 日経ち食生活にも慣れ、昼間にはオーストラリアに来て大好物となったミートパイを食べレースに向けて万全な状態に仕上げた。

レースは 17 時スタートと日本では考えられない時間から始まり、最初は驚いたが、昼間の気温の高さとオーストラリアの日の長さを考えれば当然の事だと思った。また、仕事終わりの人が観戦出来る点でも都合がよく、観客がいてこそスポーツが成り立つのだと感じた。



陸上競技場の様な平たい特殊なバンク

レースに向けての準備としては、出場メンバーのレベルの高さからレーススピードが上がると予想し前日のレースからギアを一枚重くした。またバンクがなく真っ平らな特殊バンクのため、レース中の先頭交代時にスピードを緩めない事など前日のレースの中で感じた反省点を活かしレースに臨んだ。



次々とかかるアタックに反応する荒井



ギア比やスケジュールを確認する選手達

ハンディキャップレースでは予選を通過出来たが、各組 4 名上がりの計 2 0 名で行われた決勝では最終周回に密集した集団でのポジション争いに競り負け、着に絡むことが出来なかった。どんなレースでも展開を待つのではなく自分から展開を作る事が、やはり大切だと改めて感じた。

文・荒井

Sunday March 13th, 2016 (Day 5)
「Bendigo International Madison :Day2」

■レース

- ・スクラッチ (A Grade / 8 周回)
池邊: 4 位 / 荒井: 2 位
- ・1000mハンディキャップレース [HC40m]
池邊:Heat3 8 位 / 荒井:Heat4 8 位
- ・スクラッチ (A Grade / 12 周回)
池邊: 2 位 / 荒井: 4 位

・ケイリン

池邊:Heat1 5 位 / 荒井:Heat2 3 位
Final 6 位

レースは午後 2 時からスタート。気温は 36℃もあり、常に水分補給をしていないと倒れてしまいそうだった。また、レース時間が長いので途中でエネルギー切れを起こさない様に補食を用意したりと気を配った。

レース前には観戦に来ていた地元の子供たちにサインを求められるという少し嬉しい出来事もあった。サインをあげた子供達はその後、レースが終わるまでサポートしてくれた。



選手の下に集まる子供たち



最後まで攻めの走りを貫く事が出来た

レースはスクラッチが 2 レース、ハンディキャップレースが 1 レース、最後にケイリンという内容だった。一つでも多くの事をレースの中で吸収したいと思い、どのレースでも積極的に動くと決めレースに臨んだ。その甲斐があり 8 週のスクラッチではチームメイトの池邊さんのアシストもあり 2 位でゴールする事が出来た。続く 12 週のスクラッチでも前半から一人で集団を飛び出しラスト 1 周で捕まったものの会場を沸かせる事が出来た。

レースの最後には世界チャンピオンらによる 80 kmにも及ぶマディソンが行われた。踏んでいるギアの大きさ、ポイント周回時のスピードのキレ、交代の技術の全てに衝撃を受けた。初めて世界レベルの走りを目にし、自分が目標にすべき走りはこのレベルだと気付く事が出来た。



最終日の最後、メインイベントである男子のマディソン実力者達の走りに、観客は大いに盛り上がる

文・荒井



6日間レースの実力者も出場



約 80 km のレースのため、途中で補給も

Monday March 14th, 2016 (Day 6)

オーストラリア滞在最終日。ホームステイで大変お世話になった家族にご挨拶し、別れを惜しみながらも出発。午前中のうちにベンディゴ駅からメルボルン国際空港までシャトルバスにて移動。空港に到着後、荷物の一時預かりサービスのお店に自転車やスーツケースを預け、その後メルボルン市内観光へ。空港から市街地まではバスで 30 分程と簡単にアクセスできる。

ただこの日は国民休日であり、メルボルンの市街地のお店は閉店しているところが多かったのは残念であった。3人でメルボルン大学のキャンパスを訪れたり、ショッピングモールで買い物をしたりとしばしの観光を楽しみ、空港へ。深夜 1 時前のフライトで帰国。

文・明石



お世話になったホストファミリーと記念撮影



休日で人の少ないメルボルン市内

5. 総括

① レースについて

今回のオーストラリア遠征はベンディゴに5日間の滞在、うち3日間がレースという、例年より短いスケジュールであった。しかし一日に複数の種目を走り、3日間を通して十数レースをこなせたことは良かった。

レース参加に関して。ベンディゴマディソンは事前にエントリー。金曜日のクラブ大会は当日エントリー。共にトラブルなくレースに参加できた。運営はスムーズに行われており、初めて行っても戸惑うことなどは少なかった。

参加選手のレベルとしては、世界選手権に出場するような現地のトップレベルの選手達には当然実力は敵わないものの、その下の段階のレベルの選手達とは池邊、荒井の両名ともに勝負をできていた印象である。ただ2位はいくつかあったものの勝利はなく、やはり1位を獲るといふことの難しさは感じさせられた。

② 遠征時の携行品について

事前の連絡で伝えたものについては、選手たちは忘れることなく持ってきていた。1点、レース会場でディスクホイールに空気を入れるアダプターを忘れてきたことに気付いた（ポンプに装着された状態で使うことが多く、準備の段階で持ち物として気づかなかっただろう）。現地で借用し事なきを得た。遠征者自身が主体的に準備から実務まで行う海外遠征時には、細かいところにも注意をしていく必要がある。

③ 英語力について

- 選手：1名は聞き取りができ、ある程度のコミュニケーションも可。もう1名はほぼ理解できない。
- スタッフ：シンプルな会話によるコミュニケーションが可。海外遠征経験が複数回あり。

選手、スタッフ共に語学力は重要である。ある程度は英語を理解できる力がないと、レース会場やスーパーでの買い物、ホームステイ先でのコミュニケーションにおける理解の不一致からトラブルを生む。言葉が通じれば現地の選手とも仲良くなれることもあり、今後遠征する選手には事前に英語の勉強をしていくことを勧めたい。

④ 現地の自転車文化について

ベンディゴでは自転車が現地の人々の間に文化として根付いている。金曜日のレースには平日ながら男女合わせて100人近くのジュニアの選手達が走っており、小さい子は10歳くらいからレースに参加していた。またエリートからシニア世代の選手も多く、自転車がスポーツの中で一定の地位を築いている印象を受けた。

ジュニアの中に日本のアンカーのトラックバイク乗る選手が何人かいた。というのも、日本人で最初にベンディゴに遠征を行った明治大OBの吉井功治氏によって寄贈されたものであるらしく、吉井氏の活動が現地でのジュニア世代への競技普及に貢献している。

土日のベンディゴマディソンへの観客の入りも上々であった。400mバンクが人で埋め尽くされるような状態であり、この大会がいかに現地での一大スポーツイベントであるかを感じさせられた。日本でもいつの日かトラックレースが観客で埋め尽くされる時がきてくれることを願いたい。

⑤ 全体を通じて

(1) 池邊

初の海外でのレースということで若干の不安を持って臨んだが、ホストファミリーや明石さん、白崎さんを初めとした多くの人のサポートのおかげでとても良い経験をすることができた。一般の学生が海外遠征に行くことができる数少ない機会であるこのオーストラリア遠征の事業を次に繋げ、是非数多くの人にこのような経験をしてもらいたいと心から思う。

(2) 荒井

今回オーストラリア遠征に参加し、世界レベルの走りを体感した事で自分自身に足りない物が何か分かった。それは自分の力を信じその力を100%発揮する能力だと思う。オーストラリアの選手は皆、自信に満ち溢れていた。その自信は、やはり日々の練習の積み重ねからくるものであると思う。自分に自信が持てなかったという事は日々の練習がまだまだ足りないという事だ。小さな気付きに思われるかもしれないが自分にとっては次のステップに進む大きなヒントになった。

今回、日本の学生が世界レベルの走りを体感する機会が減多にない中で、この様に貴重な体験が出来たのは学連の方々をはじめとする、遠征の企画からオーストラリアでの生活まで手配を下さった白崎さん、現地での活動を全て支えて下さった明石さん、多くの方々の協力があった事だと思う。本当に感謝したい。

今後もこの素晴らしい活動が何年も続くために何か少しでも自分に出来る事があれば全力で協力したいと思う。

(3) 明石

学連のオーストラリア遠征にスタッフという形で参加でき、私も非常に良い経験を積むことができた。私個人の意見としては、この遠征で選手達には競技者としてレースや海外遠征の経験を積むだけでなく、海外の自転車文化に触れることを通して、今後日本における自転車競技の発展に少しでも貢献してくれることに期待したい。そして今後もこの遠征が続き、一人でも多くの選手が参加していくことを望むのと、機会があれば私も再び同行したいと思う。

本遠征の後、池邊は全日本学生ロード個人TTで優勝、荒井は国体ポイントレースで優勝し強化指定選手へ選出。2014年メンバーの新村穂選手、2015年メンバーの岡本隼選手に続き遠征を経て成長し全国大会で結果を残したのは大変喜ばしい限りである。

⑥ 終わりに

本遠征において事前アドバイスやホームステイ先の手配等で手回しをいただいた同志社大学OBの白崎氏、また本遠征の生みの親である明治大学OBの吉井氏の2名には大変お世話になりました。ありがとうございました。